

優秀賞

未来は自らが開いてゆく

(中部) (株)サンワ

齊藤 輝昭

未来は変えられる。そんなことは未来になってみなければ分からない、そう思う人も多いと思います。私もそう思うのですが、二十代に遡り、今の自分を見たならば、未来は確実に変わったと思うのです。

20歳でトラックドライバーとなった私にとって、当時の目標は誰よりも売上げを上げること、定期便に加え、特車便を走るのは当たり前、時には昼・夜・昼と寝不足が日常化して、何度高速道路の路肩の白線を越えてしまったことか、パトカーに警告を受けることも一度や二度ではありません。それでも自分の運転には絶対の自信を持っていました。

ある時、運転席でうとうとしていたその時に工場の課長さんにトラックを前に出してと言われ、ボーッとしたまま動き出した次の瞬間、ガリガリという音、積み込み途中で幌を開けた状態だったのです。

先輩からは「あんまり無理するなよ」との言葉に、分かった様な顔をしながらも、俺は大丈夫と高を括り、安全は実力で守れると傲慢極まりない状態でした。それもそのはず、度々の危機一髪も間一髪で難を逃れることで根拠の無い自信となっていたのです。

そんな私が厳しい現実に晒されるのが数年後、その頃の私は更に自惚れの極致にありました。仕事は少しセーブし、遅咲きながらプロボクシングのライセンスを取り、長距離トラックとプロボクサーの二足のわらじです。減量の為に夏場にカップを着て、ヒーターを掛けてトラックを運転することも、そんな私のデビュー戦は、世界タイトルマッチの前座で見事にTKO勝ちしたのです。有頂天になっていましたが地獄は間もなく訪れました。

岡山県内で帰り荷を積んで出発して間もなくでした。急ぐこともなく原付バイクに追従していました。ミラーでうしろを見ると後続車も随分長くなっています。道幅が広がった所で、ここなら十分に抜けると原付から大きく離れて抜きかけたその時です。それまで道路左側を走って行くものだとばかり思っていた原付が、何のためらいも無いかの様に道路中央に寄ってきたのです。

瞬間、間に合わないと思うより先に全力でブレーキを踏んでいました。原付はトラックに追突されたことで前輪が浮いた様に見えたのも一瞬、その姿は直ぐに見えなくなりました。

トラックが停止したのはその十数m先でした。ブレーキを踏んでいた右足の膝はシートベルトを締めていたものの強打していましたが、そんなことに構っているわけではありません。助かっていてくれと祈り、ドアを開け、飛び降りようと下を見たそこに居たのです。

頭を右前輪に向けて仰向けになっていた女性に「大丈夫ですか」との声掛けに「頭が痛い」との小さな声を聞いたとき生きている、助かったと思いました。現場は少し下り坂で、原付を避けようとハンドルを切ったものの、道路左はコンクリートでできた縁石、停止したトラックの左前輪とは何cmも残っていませんでした。

また、その時に積んでいたのが、トリクロールエチレンの入ったドラム缶10tなのですが、全て寝かせて積んだ最後部だけ二段積みになっていた為、トラックが完全停止する前に轟音を立てながら、一段目のドラム缶の上を転がり荷台の最前部にドンドンとぶつかってきました。万一にもドラム缶に穴が空いてしまっていたらと思うとぞっとします。

奇跡的に死亡事故にならずに済んだのですが、何度も何度もあれは夢じゃ無かったのかと思うのですが、直ぐに現実に引き戻され、何もかもが狂ってしまった、全てが0からやり直した、そんな26歳の7月でした。

自分の自信は、粉々に先のことなど何も考えられる状態ではありません。それから数年は、目の前の仕事に集中しようと自分に言い聞かせて前を向く以外にありませんでした。一年、また一年と無事故の記録を続け、会社から10年無事故賞を貰ってもヒヤリハットの度に最悪の事が頭をよぎるのです。そこから更に10年、SDカードも20年を越えた頃には、後輩を教える立場となり、更に安全意識が高まったと思います。目の前の人に語る一言、一言が自分への戒めとなりました。

私の小学生の時の同級生に二十歳前、免許取り立ての頃の交通事故で首の骨を折り半身不随となってしまった人が居ます。たった21人の同級生ですが、還暦を迎えることができたのが15名、その中の一人として彼も入っているのです。もう45年も寝たきりです。彼のことは田舎の同級生も口にする事が無く、その事を知ったのは厄年の頃。とても会いにも行けません。

そんな同級生の事も、新人ドライバーに交通安全を教えるときに、伝えることが私の使命と感じています。自身の数々の失敗も今では安全を語る私の大きな財産となっています。この財産で、一人でも多くの人の未来を明るくものに出来たら一番の喜びです。